

02-018

東日本大震災後2年から3年における心健康度、疲労度の推移からの考察 —福島市及びその近郊で働く母親を対象に—

七木田 方美

比治山大学短期大学部 幼児教育科

【目的】

大震災における内部被爆に対する母親の心の健康の回復過程を明らかにする。

【方法】

対象：福島市及びその近郊で各戸訪問の仕事に従事する女性約100名。期間：地震発生から1年半を経過した2012年9月から2014年4月。内容：計5回のワークショップ（以下WS）を開催し、心の健康度及び疲労度を、標準化されたテストSUBI (Subjective Well-Being Inventory) を用いて測定し、その変容を分析した。

【結果】

1. 「心の健康度」は、災害から2年経過した時点での上昇があった ($p < .05$)。下位項目では「人生に対する前向きな気持ち」($p < .10$)「近親者の支え」($p < .01$) が上昇した。災害から3年経過した2014年3月時点では、心の健康度がさらに上昇し ($P < .01$)、特に「達成感」($p < .01$)「近親者の支え」が良好になった。2. 「心の疲労度」は、2012年9月、2013年3月、2013年10月の順に悪化した ($p < .01$)。下位項目から「精神的なコントロール感」の低下が顕著であった。2014年3月には「家族との関係」「精神的なコントロール感」「社会的なつながり感の不足」「人生に対する失望感」の改善がみられた (すべて $p < .05$)。「精神的なコントロール感」「社会的なつながりの不足」は震災より2年の2013年10月時点まで悪化した。2014年3月には回復した。3. WS未実施群と比較すると、2013年3月は心の健康度の下位項目「人生に対する前向きな気持ち」($p < .05$)「達成感」($p < .05$)「幸福感」($p < .01$) が、WS実施群が良好であった。2014年3月はWS実施群の心の健康度が有意に高くなり、下位項目では「達成感」「幸福感」(ともに $p < .01$)、「人生に対する前向きな気持ち」「近親者の支え」「社会的な支え」「家族との関係」(すべて $p < .05$) と良好になった。WS実施群は心の疲労度の下位項目「人生に対する失望感」が未実施群に比べ良好であった ($p < .01$)。4. WS未実施群では、WS実施群に比べ、2014年4月時点での心の健康度にもばらつきがみられたが、WS実施群では心の健康度が全体的に上昇し、疲労度が減少したため、ばらつきは緩やかになった。

【考察】

本研究におけるワークショップ実施群の心の変容は、SUBIの結果から次のように推測できる。・「近親者の支え」「達成感」という、身近な人や家庭、社会における自分の役割が心の健康を支える。・家庭や社会に支えられている自信や役割に対する達成感をもとに、自分自身の「精神的なコントロール感」を獲得していく。

02-019

東日本大震災後の福島県郡山市における児童生徒の4年間の体重推移について

高橋 千春¹、菊池 信太郎^{1,2}¹医療法人仁寿会 菊池記念こども保健医学研究所、²郡山市震災後子どものケアプロジェクト

【趣旨】

東日本大震災に伴う放射線拡散事故の影響により、福島県の子どもたちは様々な制限を強いられてきた。特に、長期におよぶ屋外活動の制限は子どもたちの身体に大きな影響を残し、体力・運動能力の低下や肥満傾向児の増加など、今もなおその問題は解決されていない。私たちは平成24年度より、福島県郡山市に在住する小・中学生を対象に体格や体力・運動能力の変化、生活習慣の変化を継続して調査している。今回は、4年間の体重やその増加量に着目して推移を検討したので報告する。

【方法】

平成24年度に市内の小学校1学年から6学年であった全児童の体格を平成27年度までの4年にわたり計測。それぞれ男女別に計12群に分け、体重の平均値、年間の増加量を福島県および全国の値と比較した。市内の児童（各学年およそ2900人）は毎年6月に行っている体力・運動能力調査時の体重を、福島県および全国の児童は文部科学省学校保健統計調査の体重を用いた。なお、郡山市のデータは4年間ほぼ同一の母集団であるが、福島県および全国は層化二段無作為抽出法によるデータである。

【結果】

1) 体重の平均値：12群全てで、郡山市と福島県の児童の平均体重は継続的に全国を上回っていた。郡山市と福島県では群によって異なるが、全体的には福島県の方がやや高い傾向にあった。2) 4年間の体重推移：全国の平均値の増加量と同じ傾向を示したのは、主観的判断ではあるが、郡山市で12群ほぼ全ての群であったのに対し、福島県では男児1群、女児0群であった。

【考察】

震災以降の4年間において、郡山市内の全ての児童生徒の平均体重は福島県同様に全国に比して過剰の状態が持続している。体重の推移では、郡山市では全国とほぼ同様に経過を示していたが、福島県全体では特徴的な変化を示す群もあった。体重の平均値と肥満傾向児出現率の推移を組み合わせると、平均値では全国との差がないにも関わらず、出現率で大きな差が見られる群もある。従って、体重の平均値の推移のみではなく、出現率の推移も合わせて考えていく必要がある。また、男児では小学6学年から中学1学年、女児では小学5学年から6学年に増加量のピークを迎えることから、この前後数年の変化に注意が必要である。震災後の生活環境の変化の影響を大きく受けた未就学児がこれから学童期に入るため、高学年の児童生徒とは今後異なった推移をしていくかどうかを見守ることも重要になってくる。